

類義の字音接頭辞「本」と「当」について

張 明

【要旨】

本稿は類義の字音接頭辞「本」と「当」について考察するものである。先行研究と異なり、本稿は「本」と「当」に、直示的用法だけでなく、前方照応的用法も認め、論を進める。直示的用法の「本」「当」は、話し手が自分側と関係している何かを改まりの気持ちで指す点で共通する。相違点は、心内で認識した立場関係が同じか対立かにある。前方照応的用法の「本」「当」の共通点は、「この」と類似した機能を果たすことである。相違点としては、「本」は「この」との性質が一致する点が多く、「その」との類似点を持っていない。それに対し、「当」は「この」との類似性が弱く、「その」との類似性も持っている。

【キーワード】

字音接頭辞、「本」、「当」、直示、前方照応

1 はじめに

字音接辞をめぐっては、これまで多くの研究がなされてきた。しかし、字音接頭辞の研究、特に類義関係にある字音接頭辞の研究はあまり盛んとはいえない。山下（2013）では、類似する意味や機能のある字音接辞について、造語機能がどのように記述できるのか具体的に検討することが課題になる（同：91）と指摘されている。

そこで、本稿は、類義関係にある字音接頭辞に焦点を当て、そのうち、(1) (2) で示した「本」と「当」を考察対象とする。

- (1) 思春期の子どもの援助については、本シリーズ「思春期の危機と子育て」を参考にしてください。 (BCCWJ『不登校とのつきあい方』2005)¹
- (2) やがて、紋付羽織袴の男が挨拶に来た。「私は当組合の委員長です。皆さん、遅い夕張からようこそお出下しました。(下略)」(BCCWJ『わが戦後私記』2001)

本研究が「本」と「当」を考察対象にするのは、(3)のように、国語辞典には両者の相違点が十分に記述されていないからである。

(74)

(3) 本：名詞に付けて、今、現に問題にしているもの。当面のものである意を表わす語。当の。この。

当：名詞の上に付いて、この、その、現在の、さしあたっての、などの意を表わす。
（『日本国語大辞典』（第二版. 小学館. 2001））

また、『新選国語辞典』（第九版. 小学館. 2011）には、「自分の」という意味で使うときは「当」は使いにくい」という説明があるが、『三省堂国語辞典』（第七版. 三省堂. 2014）には、「(引用者注:「当」は「私どもの」の気持ちで使うことが多い」と正反対の記述がされている。よって、「本」と「当」を比較し考察することを進め、両者の相違点を明確にすることが必要だと考えられる。

2 先行研究：国広（1997）

「本」と「当」についての先行研究は管見のかぎり、国広（1997）しかない。ここでは国広（1997）の主張を概観し、その問題点を検討する。

国広（1997）は、前方照応的な「同」と異なり、「本」と「当」は直示的に用いられると指摘し、両者の違いを中心に、詳しく論じている。

まず、(4)～(7)の「本校・当校」などの用例を用いて、「本」は話し手と聞き手が同一のグループに属しているときに用いられ、包含的であり、「当」は逆に両者が異なるグループに属しているときに用いられ、除外的である（国広 1997：31）と説明している。

(4) 本校の生徒に告ぐ。 (p. 31)

(5) ×当校の生徒に告ぐ。 (同)

(6) ×本校は部外者の立ち入りを禁じます。 (同)

(7) 当校は部外者の立ち入りを禁じます。 (同)

更に、「本人・当人」「本日・当日」の用例については、先の「包含的」「除外的」を使って説明するには無理があると述べ、更なる分析を行い、(8)のように結論づけている。

(8) 本一 〈心的視点が「本」が指すものの内部にあり、視野も内部に限られる〉

当一 〈心的視点が「当」が指すものの外部にあり、「当」が指すものを、それを取り巻く状況の中心として眺める〉 (p. 33)

しかしながら、国広（1997）には以下の問題点があると思われる。

まず、国広（1997）の最も大きな問題は、「本」と「当」を直示的であると位置づけ、(9) (10) のように、前方照応的用法の「本」と「当」を考慮していないことである。

(9) 午王山遺跡はこれまでに5次にわたる調査が実施され、次第にその全貌が明らかになりつつある。本遺跡は弥生時代後期の環壕集落として著名で、(下略)

(BCCWJ『古代東国の考古学的研究』2003)²

(10) 経済産業省企業法制研究会「ブランド価値評価研究会（委員長：広瀬義州）」が公表したブランド価値評価モデルで計算した価値評価額がこのレベルに該当する。当研究会の報告書は、以下の URL から入手できる。

(BCCWJ『知的財産の証券化』2003)

前方照応的用法の「本」と「当」は実際に使用され、考察対象にすべきである。前方照応的用法については3.2と5節で詳細に述べる。

更に、国広（1997）の最も重要な主張は〈心的視点〉説であるといえる。〈心的視点〉説は「本日・当日」「本人・当人」の用例を考慮して導き出した結論である。しかし、「当日」は言語文脈にすでに現れた指示対象を基準に、その指示対象を示す語であり、直示的な語ではない。また「本人・当人」には、(11) (12) が示すように直示的ではない場合もある。

(11) 古田監督は2010年から指揮を執ったが12年、2部リーグの「チャレンジリーグ」に降格。昇格を目指していたがかなわず、本人の希望で退団が決まった。

(ヨミダス歴史館. 2014. 5. 21)

(12) もう一つは、書道の恩師からの賀状。宛名に区名が抜けていたが、後は間違っていないものが返送されたと当人から電話を頂いた。

(ヨミダス歴史館. 2014. 2. 1)

直示的用法の「本」と「当」の違いを説明する際に、直示的ではない「当日」や、文脈に照合しないと直示的か否かが確定できない「本人・当人」を使用するのは不適切であり、そこから導き出した〈心的視点〉説も妥当なものだとは疑問を感じる。

以上のことから、直示的用法の「本」と「当」の相違点を適切に説明できる観点、および前方照応的用法の「本」と「当」が有する特徴を明らかにする必要があると考える。

3 直示的用法と前方照応的用法

まず、直示的用法と前方照応的用法の「本」と「当」はどのようなものなのか、「本」

(76)

と「当」の共通点は何かについて確認する。

3.1に入る前に断っておくことがある。後接部分が所属先を表す場合は、話し手と聞き手がその所属先とどのような関係にあるのかを観察しやすいため、3.1では、後接部分が所属先を表す場合に限定して論を進める。後接部分が所属先を表さない場合は、基本的に後接部分が所属先を表す場合と結論が一致するというをまた4.2で後述する。

3.1 直示的用法

国広(1997:37)は「直示的な語というのは、その指す事物が発話のなされた時点、発話者のいる地点、発話者の向いている方向を基準にして決まる語」と述べている。本稿はこの定義に従い、(13)～(16)の「本」と「当」の用法を「直示的用法」と呼ぶ。

- (13) 総会には、JAZAの総裁を務められる秋篠宮さまも出席。あいさつで、「文化の問題と、本協会がWAZAという組織の一員であることは、分けて考える必要があると考えます。(ヨミダス歴史館.2015.5.29)
- (14) 新春恒例行事の式典で、法王出席を知った物理学の教授らが1月10日、「本大学はあらゆる信仰、あらゆるイデオロギーに開かれている」とし、招待を取り消すよう求める請願書をグアリーニ学長あてに送った。(ヨミダス歴史館.2008.1.16)
- (15) 「ということは私もホテルサンラインですね?」「いえいえ、当添乗員さんには当ホテルにお泊まりいただきます」
(BCCWJ『添乗員は見たどっきり激安バスツアー』1997)
- (16) 改装工事のお知らせ(中略)大変恐縮ですが、当店舗工事期間中はお近くの松屋のご利用を何卒よろしく願います。(BCCWJ.Yahoo!ブログ.2008)

(13)の「本協会」は話し手³である総裁の所属の協会である。話し手が変われば、「本協会」がどの協会を指すのかも変わる。このように話し手を基準に「本〇〇」が何を指し示すかが決まる「本」の用法は直示的用法である。(15)(16)の「当」も同様である。

次に、直示的用法の「本」と「当」はどのような共通点があるのかを確認する。(13)～(16)の話し手と聞き手の関係を表1のように示す。

表1 (13)～(16) の話し手と聞き手の関係

用 例		話 し 手		聞 き 手			
本	(13) 本協会	協会の総裁	(内部の人)	内 部 の 人	協会の会員	(内部の人)	内 部 の 人
	(14) 本大学	物理学の教授	(内部の人)		教授や学長	(内部の人) ⁴	
当	(15) 当ホテル	受付の人	(内部の人)	内 部 の 人	添乗員	(外部の人)	外 部 の 人
	(16) 当店舗	従業員	(内部の人)		お客様	(外部の人)	

表1を簡潔にまとめると、(17)のようになる。

- (17) 本—[話し手:内 → 聞き手:内]
 当—[話し手:内 → 聞き手:外]

(17)は2節で述べた、国広(1997)の「[本]は包含的で、[当]は除外的である」という結論と一致する。しかし、(17)には反例がある。

(18)「特待生制度は全国的な問題となり、大変混乱した地区予選となってしまった。……(中略)。本連盟も真摯(しんし)に対応する」。18日の県大会開会式で、県高野連の池内正一理事長は、高橋健二会長のあいさつを厳しい表情で代読した。
 (ヨミダス歴史館. 2007. 5. 19)

(19) 総長:足柄先生、あなたは愛妻家の仮面をかぶり、不貞の限りを尽くしました。あなたの行いは当病院の品位を著しく傷つけるものです。
 (『Doctor-X 外科医・大門未知子Ⅲ』3話)

(18)と(19)を分析すると、表2の通りである。

表2 (18) (19) の話し手と聞き手の関係⁵

用 例		話 し 手		聞 き 手	
本	(13) (14)	(内部の人)		(内部の人)	
	(18) 本連盟	理事長・会長	(内部の人)	県大会参加者	(外部の人)
当	(15) (16)	(内部の人)		(外部の人)	
	(19) 当病院	総長	(内部の人)	足柄医師	(内部の人)

(18)の「本」は(13)(14)の「本」とは異なり、聞き手には「連盟」外部の人がいるにもかかわらず、「本」が用いられている。同様に、(19)の「当」も聞き手が「病

(78)

院」内部の医師であるにもかかわらず、「当」が用いられている。以上のことから、直示的用法の「本」と「当」の共通点は、(20) のようにまとめることができる。

(20) 本・当一[話し手：内 → 聞き手：内/外]

3.2 前方照応的用法

本稿は国広 (1997) と異なり、「本」と「当」には (21)～(24) のような前方照応的用法があると主張する。

- (21) 第2期科学技術基本計画においては、優れた成果を生み出す科学技術システムを実現するための柱のひとつとして、評価システムの改革が挙げられている。本基本計画に基づき、(下略) (BCCWJ『科学技術白書 平成14年版』2002)
- (22) 全国の市町村で計測された震度情報を消防庁へ即時送信するシステム (震度情報ネットワーク) は、平成9年4月から運用を開始し、本システムで収集された震度データは、気象庁にもオンラインにより提供しており、(下略)
(BCCWJ『消防白書 平成14年版』2002)
- (23) 平成4年度においては、農業集落排水事業について839億円の予算を計上し、600の継続地区について早期供用開始を目指し事業の推進を図るとともに、農村地域の水質保全と生活環境の改善のため、早急に当事業の着手が望まれている地区を中心に新規採択地区数を増加させ、(下略)
(BCCWJ『環境白書平成4年版』1992)
- (24) AED (自動体外式除細動器) とは、(中略) 電気ショックを与えて正常なリズムに戻すための医療機器で、平成16年より医療従事者でない一般の人でも使用できるようになりました。本町では当機器の公施設への設置を進めており、(下略)
(BCCWJ『広報やかげ』2008年12号)

山梨 (1992: 2) では、ある言語表現が、これに後続する言語表現と同一の内容ないしはおなじ対象をさす場合、これらの表現は「照応関係」にあるとされている。(21) の「本基本計画」や (23) の「当事業」はそれぞれ、先行文脈にある「第2期科学技術基本計画」「農業集落排水事業」を指し示し、照応関係にあるといえる。先行詞「第2期科学技術基本計画」「農業集落排水事業」が、照応詞「本基本計画」「当事業」より前に出現するため、「前方照応」と認めることができるだろう。本稿は山梨 (1992) の定義に従い、(21)～(24) のような「本」と「当」の用法を「前方照応的用法」と呼ぶ。

「本」「当」と同様に、名詞が後接し、前方照応的用法を持つのは、「この」と「その」である⁶。(21)～(24) を見ると、先行詞は固有名詞とはいえないものもあるが、特定の

なものであるとはいえるだろう。指示対象が特定のであるため、「本」「当」をともなった名詞句は「話者にとって指示的」(堤 2012)であるということになる。「話者にとって指示的」というのは、「この」の機能である(堤 2012)。よって、前方照応の用法の「本」と「当」は「この」と類似した機能を果たし、「この」との類似性を持つことがわかる。つまり、「この」との類似性を持つことが前方照応の用法の「本」と「当」の共通点である。

4 直示的用法の「本」と「当」の比較

直示的用法の「本」「当」の共通点を 3.1 で確認した。3.1 と同様に、相違点についても後接部分が所属先を表す場合から見ていく。

4.1 後接部分が所属先を表す場合

ここでは後接部分が所属先を表す場合に、直示的用法の「本」と「当」はどのような相違点があるのかについて検討する。

まず、「本」も「当」も[話し手：内 → 聞き手：内]の場合を見る。

(25) 式では北島正樹学長が「授与された白衣を着て本大学への帰属意識を高め、医療人として誇りと責任感を持って実習に望んでほしい」と激励。

(ヨミダス歴史館. 2013. 4. 16)

(25') [話し手 (学長)：内 → 聞き手 (学生)：内]

(26) 理事長：理事会全員一致で決定しました。赤目義二医師を当病院の院長から更迭する。新たに広瀬史也医師を院長とし、新たな体制をもって、病院運営の健全化を目指す。

(『リーガルハイ・スペシャル 2014』)

(26') [話し手 (理事長)：内 → 聞き手 (赤目院長)：内]

聞き手がその所属先の内部の人の場合、「本」も「当」も使うことができる。その相違点を本稿では「心理的立場関係」を用いて説明する。

話し手が聞き手と実際にどのような立場関係にあるかではなく、心内で認識した聞き手との立場関係を本稿では「心理的立場関係」と呼ぶことにする。

(25) は「白衣授与式」で、例文にも「帰属意識」「誇り」という言葉が出ており、同じ大学に所属している事実が強調されている。このような場面⁷では、話し手の学長は心内では、聞き手の学生に対し、対立的な上下関係にある相手としてではなく、同じ大学の内部に属するメンバーとして認識する。よって、「本」が使われていると考えられる。

一方、(26) では、理事長は赤目院長に対し、解任という決定を言い渡した。話し手

の理事長は心内ですでに赤目院長を外側の人間として認識する。そのような心理的立場関係によって、「当」が使われていると考えられる。

次に、[話し手：内 → 聞き手：外] の場合の例を見る。

(27) 開始式で同協会会長の■■■■■さんは、「二年前から本協会と丹波自然運動公園が共催し、行政の手を借りない手作りの大会として新たな歴史を刻んできた。(下略)」とあいさつ。(BCCWJ『広報京丹波 2008 年 12 号』2008)

(27) [話し手(協会会長)：内 → 聞き手(大会参加者)：外]

(28) 資格商法と不実告知ケース 6 X の勤務先に、Y 企業経営協会から電話があり、「当協会」で開いている講座を受講すれば、企業経営コンサルタントの資格を取得できます。この資格は、(下略) (BCCWJ『民法講義』1(総則)2005)

(28') [話し手(協会のスタッフ)：内 → 聞き手(X)：外]

聞き手はその所属先の外部の人の場合、「本」も「当」も使うことができる。その違いについても、「心理的立場関係」で説明できる。

(27) については、話し手の協会会長は、自分の協会が主催するロードレースに参加する聞き手に対し、心内ではともにイベントを作り上げてくれる仲間だと認識すると考えられる。また、「新たな歴史を刻んできた」という表現から、誇りといった感情が伝わってくると思われる。よって、「本」が使われている。一方、(28) は、話し手が聞き手の X を自分の協会の講座に勧誘する文脈である。協会内部の人は X を外側のお客様として認識し、お客様という立場関係によって、「当」が使われている。

以上のように、「本」と「当」の直示的用法の相違点は、心理的立場関係を用いて説明できると考えられる。話し手の心内に帰属意識や誇りといった感情が現れ、聞き手と心内で同じ立場関係にあると認識する場合は、「本」が用いられる。それに対し、話し手が心内で聞き手に対して対立的な立場関係と認識する場合は、「当」が用いられる。

最後に、国広(1997)の〈心的視点〉説と本稿の「心理的立場関係」の関係について述べる。国広(1997)の結論を簡潔に述べれば、「本」は〈内部視点〉で、「当」は〈外部視点〉ということになる。しかし、どのような時に、〈内部視点〉になるか、どのような時に、〈外部視点〉になるかという指摘はない。本稿の「心理的立場関係」を用いて述べれば、話し手が聞き手と心内で同じ立場関係にあると認識する時は、〈内部視点〉になり、「本」が用いられ、それに対し、話し手が心内で聞き手に対して対立的な立場関係と認識する時は、〈外部視点〉になり、「当」が用いられる。つまり、直示的用法の「本」と「当」の違いを説明するには、〈心的視点〉説は、本稿の「心理的立場関係」によって決められる二次的概念であり、直示的用法の「本」と「当」を説明するには、必ずしも必要ではないといえる。

4.2 後接部分が所属先を表さない場合

次に、直示的用法の「本」と「当」の後接部分が、所属先を表さない場合を考察する。

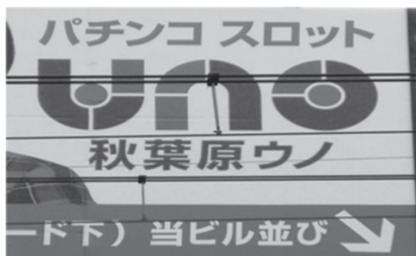
- (29) 私たちは、過去をうまく分かち合うことはできなかったが、将来はもっとよくやれるでしょう。本シンポジウムが、この惑星における平和ネットワークの重要性を確認する道になると信じております。 (ヨミダス歴史館. 1998. 05. 20)
- (30) 映画に反発する国会議員との対話で「本作品を見た若者が非行に走るとは思えない。若者の良識を信じる」と言っておきながら、記者会見では「ルールをかくぐってでも見てほしい」と言っている。 (ヨミダス歴史館. 2014. 5. 22)
- (31) この作品は当ブログ管理者の keisuke_genso が製作したものであり、製作者の許可無く改変・修正・転載・公開の行為は禁じます。

(BCCWJ. Yahoo! ブログ. 2008)

(32) 写真1「当看板」⁸



(33) 写真2「当ビル」⁹



後接部分が所属先を表さない場合、話し手は「シンポジウム」や「看板」などと「所属」という関係にはないが、無関係ともいえない。例えば、(29) は話し手がいま参加している (関係している) シンポジウムに対して、「本シンポジウム」が使われている。(30) は映画監督自身の発言で「本作品」が使われている。一方、「当」が使われている(31) (32) の例で、話し手は「ブログ」「看板」の管理者や責任者に当たる人であり、後接部分が表すものが話し手側と関係していると考えられる。

よって、後接部分が所属先を表さない場合も、(20) の「本・当—[話し手：内 → 聞き手：内/外]」という結論が適用できる。すなわち「本」も「当」も「話し手が自分側と関係している何かを改まりの気持ち¹⁰で指す」ということになる。

共通点を確認したが、相違点はどうか。話し手は心内で聞き手に対して対立的な立場関係と認識する場合には「本」より「当」がよく使われる。その典型的な聞き手は「お客様」だと考えられる。そのため、(32) (33) のようなお客様に対する情報案内

は「当」が使われるのが一般的であろう。また、BCCWJより、「本ブログ」はわずか14例しか採取されていないのに対して、(31)のような「当ブログ」は158例採取されている。「ブログ」は読者に見せるために存在するものである。ブログの読者がその管理者にお客様のように扱われているため、「当」が使われていると考えられる。

一方、「本」は、お客様に対する情報案内に使われる「当」とは異なる傾向が見られる。(29)の話し手と聞き手は同じシンポジウムに参加している人同士で、後接部分が指すものに対し、同じ立場関係にあると考えられる。「重要性を確認する道になると信じております」からうかがえるように、帰属意識や誇りといった感情も現れている。よって、「本シンポジウム」が使われていると考えられる。

以上のことから、直示的用法の「本」と「当」の共通点と相違点は、後接部分が所属先を表すか表さないかに関わらず、同様に説明できることがわかった¹¹。

4.3 指示詞との関係

後述する5節では、指示詞「この」「その」との関係から、前方照応的用法の「本」と「当」の比較分析を行う。その前に、まず、直示的用法の「本」と「当」が指示詞とどのような関係を持っているかについて見ておく必要がある。

話し手が聞き手と心内で同じ立場関係にあると認識する場合に、「本」が使われる。これは、話し手と聞き手が並んでいる場合、すなわち直示のいわゆる「融合型」と類似する。それに対し、心内で聞き手に対して対立的な立場関係として認識する場合に、「当」が使われる。これは、直示のいわゆる「対立型」と類似する。また、「本」と「当」は、話し手の自分側と関係している何かを指すということで、直示の「その」「あの」ではなく、いずれも直示の「この」と類似した機能を果たす。したがって、直示的用法の「本」は融合型の「この」、「当」は対立型の「この」と類似した機能を果たすという関係が見られる。

5 前方照応的用法の「本」と「当」の比較

前方照応的用法の「本」と「当」は同じく前方照応的用法を持つ「この」と類似性を有することを3.2で確認した。また、4.3では、直示的用法の「本」と「当」は、「融合型」か「対立型」かという点で異なるが、いずれも「この」と類似した機能を果たすことを指摘した。前方照応的用法は直示的用法から派生した用法であり¹²、直示的用法の「本」と「当」が直示の「この」と対応するのならば、前方照応的用法の「本」と「当」も「この」との類似性を有するのにも理解できるだろう。特に、前方照応的用法の「本」は、「この」との類似性が大きく、「その」との類似性を持っていない。前述した要因以外に、2つの要因と関係すると考える。

第一に、「この」が前方照応的用法においても直示的性質を有すること（堤2012：

181) と関係する。

(34) 6. 鉄鋼委員会 本委員会は、78年10月に設立され、OECD加盟二十カ国及びECが参加しており、(中略) 7. 科学技術政策委員会 本委員会は、各国の科学技術政策の立案、実施についての意見交換を行う場として設けられた。(中略) 8. 情報・コンピュータ・通信政策委員会 本委員会は、近年の高度情報技術の発達にかんがみ、82年4月に科学技術政策委員会から独立した委員会である。(BCCWJ『通商白書 昭和61年版(各論)』1986)

(35) 2016年度日本語学会春季大会発表賞

(中略)

岡田一祐氏「『和翰名苑』における平仮名字体認識」

〔授賞理由〕

本発表は平仮名の字体認識(字源別ではなく)をどのように客観化するかということについて、(下略)

(<https://www.jpling.gr.jp/kaiin/gakkaisyō/happyosyo/>)

「本委員会」「本発表」は、文脈上で独立した見出しを指示する。前方照応的用法ではあるものの、直示的用法には近いといえるだろう。よって、「本」が直示的な性質を有すると考えられる。この点で、「本」は「この」と同様の機能を果たす。

第二に、「この」は話し手/書き手が先行詞を「テキストのトピックの関連性」という観点から捉えていることを示すマーカー」(庵2007:118)であることも関係する。これは、第一に述べたことと直接関わっている¹³⁾。(34)(35)は見出しが先行詞になっている。見出しの後ろに続く文脈は、当然その見出しについて述べるものである。見出しが表すものが後文脈に出てくる場合、「本」で指示する。この点で、前方照応的用法の「本」は、トピックとの関連性が高い名詞句をマークする機能を持つ「この」と同様の機能を果たす。

それに対し、前方照応的用法の「当」は見出しを指示する用例が見つからない。それは、「当」が「この」との類似性も有するものの、「本」と比べ、「この」との類似性が弱いことを物語っている。また、(36)(37)の「当」は、「この」に置き換えても、「その」に置き換えても、さほど差がないと思われる。「当」は「この」だけでなく、「その」との類似性も持つ¹⁴⁾。「当」は、「本」と比べ、「この」との類似性が弱いことに起因しているのではないかと考えられる。

(36) 工務店等向けに障害のある人にも対応した「高齢化対応住宅リフォームマニュアル」を作成し、その普及を図るとともに、増改築相談員等に対し、当マニュアル

(84)

アルを用いて研修を行っている。(BCCWJ『障害者白書 平成12年版』2000)

- (37) 今回、ダニトマス大学の招きに応じたのは、当大学の図書館の資料をかつて利用していたことに対する感謝の気持ちの表現だといわれている。

(『ヨミダス歴史館』1991.6.25)

本節の内容をまとめると次のようになる。前方照応的用法の「本」と「当」は基本的には「この」と類似した機能を果たす。特に、「本」は「この」との性質が一致する点が多く、「その」との類似点を持っていない。それに対して、「当」は「本」と比べ、「この」との類似性が弱く、「その」との類似性もある。その点が相違点になる。

6 おわりに

本稿は、直示的用法と前方照応的用法を持ち、類義関係にある字音接頭辞「本」と「当」を考察した。まとめると、表3のようになる。

表3 「本」と「当」の比較

		「本」	「当」
直示的 用法	共通点	話し手が自分側と関係している何かを改まりの気持ちで指す。	
	相違点	話し手の心内には帰属意識や誇りと いった感情が現れ、聞き手と心内で 同じ立場関係にあると認識する。	話し手が心内で聞き手に対し て対立的な立場関係にあると 認識する。
前方 照応的 用法	共通点	「この」との類似した機能を果たす。	
	相違点	「この」との性質が一致する点が多 く、「その」との類似性を持たない。	「この」との類似性が弱く、 「その」との類似性も持つ。

「本」「当」と同様に、直示的用法と前方照応的用法の2用法を持つ字音接頭辞はほかにはどのようなものがあるのか、指示表現と関係する字音接頭辞を体系的にどのよう捉えればよいのかが今後の課題である。

注

- 1 「BCCWJ」は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所）の略称である。下線は筆者によるもので、以下も同様。例文に出た漢数字や全角の算用数字を半角の算用数字に、全角のアルファベットを半角に、「、」を「,」に変換している。
- 2 点線も筆者によるものである。前方照応的用法の用例に記している点線は先行詞、下線は照応詞を意味する。以下も同様。

- 3 ここでいう「話し手」は対話である話し言葉のみならず、書き言葉における場合も「話し手」を使って指す。以下の「聞き手」も同様。
- 4 引用箇所だけでは、聞き手が内部の人か否かは不明だが、記事全文を確認すると、聞き手がほかの教授らや学長であり、大学の内部の人であることがわかる。
- 5 表2では、すでに言及した(13)～(16)の詳細を省くことにする。詳しくは表1を参照されたい。
- 6 本稿は金水(1999)や堤(2012)に従い、「あの」には照応用法がないという立場をとる。
- 7 補足的にいうと、所属先に対する「帰属意識」や「誇り」といった感情が文脈で明示される場合、「本」が使われやすいといえる。それは、このような場合、話し手が聞き手を自分と同じ立場関係にあると認識しやすいからである。
- 8 2014年12月に、JR東日本山手線有楽町駅ホームにて撮影したもの。
- 9 2014年12月に、JR東日本山手線秋葉原駅ホームにて撮影したもの。
- 10 「改まりの気持ち」は「本」と「当」が漢語表現であることに由来する。漢語は、公的文章や改まった場面の談話などの硬い文体で使われる傾向があるとされている。よって、「本」と「当」は何らかの改まりの気持ちを表していると思われる。
- 11 心内で同じ立場関係にある場合は「本」、心内で対立的な関係にある場合は「当」が使われるのはなぜか、その点については今後の課題としたい。
- 12 なぜ前方照応的用法は直示的用法から派生した用法なのか、その逆ではないのかということ、直示的用法が本質的な用法だからである。金水(1999)によれば、コ系列指示詞は前方照応的用法においても直示的な性質が保持される。そのため、「この」と深く関係する「本」「当」は直示的用法がより本質的ではないかと思われる。
- 13 「この」は、前方照応的用法においても、直示的であるため、当該名詞句に顕著性を与え、その結果「トピックとの関連性」を表しているのである(堤2012:184)という指摘がある。「直示的な性質」(堤2012)と「トピックとの関連性」(庵2007)のどちらが「この」の本質的な機能かという問題は本稿の関心ではないため、触れないことにする。
- 14 (3)の『日本国語大辞典』の意味記述を確認すると、「本」の語釈に「この」はあって「その」がなく、「当」には「この、その」が記述される。これは「当」が「この」だけでなく、「その」との類似性も持つことを意味すると考えられる。

用例出典

[データベース類]

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) オンライン版 ([http:](http://)

(86)

//pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/) (コーパス検索アプリケーション中納言 2.2.0 を使用。「本」の用例は2017年2月1日に最終確認し、「当」の用例は2016年12月30日に最終確認。)

読売新聞『ヨミダス歴史館』(<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>)

[テレビ番組類]

『Doctor-X 外科医・大門未知子Ⅲ』朝日テレビ. 2014年10月～12月放送.

『リーガルハイ・スペシャル 2014』フジテレビ. 2014年11月22日放送.

[ウェブサイト類]

日本語学会：<https://www.jpling.gr.jp/kaiin/gakkaisyo/happyosyo/> (最終確認：2017年3月18日)

参考文献

庵功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』 くろしお出版

金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4, pp. 67-91. 言語処理学会

国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』大修館書店

堤良一 (2012) 『現代日本語指示詞の総合的研究』ココ出版

山下喜代 (2013) 「接辞性字音形態素の造語機能」野村雅昭 (編) 『現代日本漢語の探究』 pp. 83-108. 東京堂出版

山梨正明 (1992) 『推論と照応』 くろしお出版